

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

1998
2



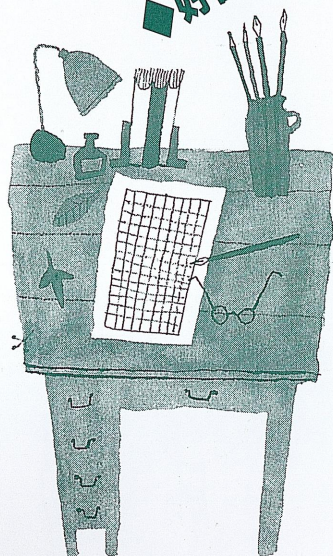
倉橋惣三 保育へのロマン

荒井 洌・著

「倉橋は決して古くない」。日本保育界の巨人・倉橋惣三の思想・理論を現代保育の現場に生かす道を明らかにした注目の本。月刊誌「保育専科」に好評連載されたものを中心に書き下し部分を加え、明日の保育現場で使えるように、分かりやすくて的確に倉橋理論を解説します。



■好評発売中

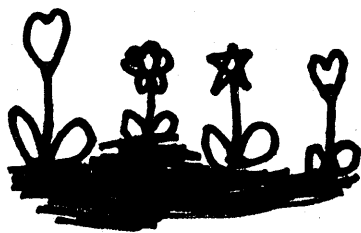


A5判・220頁・定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

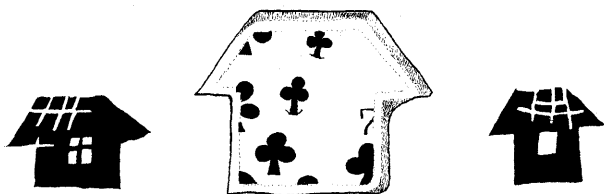
第97巻 第2号



幼 児 の 教 育 目 次 — 第九十七卷 第二号 —

© 1998
 日本幼稚園協会

カウンセリングという楽しみ……………	信田さよ子……………	(4)
子どもの生活と福祉の歴史(6)……………		
乳児死亡率問題と乳幼児健康相談事業……………	松本 園子……………	(12)
現象学から保育の世界を見る(6) 遊びへの参加とことば……………	榎沢 良彦……………	(20)
対策ではなく、本人の必要を……………	津守 真……………	(28)
ある日の育児日記から(86)……………	佐藤 和代……………	(31)



特集へ育てる▽

マラリア原虫を育てる.....	渡辺 純一.....	(32)
小さな命を見つめて.....	高柳 芳恵.....	(36)
魚の育成について.....	石塚 治男.....	(40)
ザリガニの赤ちゃんと共に育つ.....	阿部 康子.....	(46)
滄桑の街・香港から(3) 香港らしさ.....	今井 七重.....	(51)
あそびはらっぱものがたりーふゆー.....	すとうあさえ.....	(56)

表紙絵・佐藤 寛子
 扉題字・津守 真
 扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児
 カット・彌永たえ「トランプの家」
 編集委員／田代 和美・伊集院理子・上坂元絵里
 編集部・仲 明子



カウンセリングという楽しみ

信田さよ子

仕事の帰りはいつも原宿の雑踏に揉まれるように駅に向かうのが常である。目立つことに価値があるという今の日本では珍しい雰囲気を象徴するように、七色の髪やスカートをはいた若い男の子が満ちあふれている。クライアントの抱える問題に耳を傾けていた時間の重さが、若い男女の間をくぐりぬけていくうちにいつの間にか消えていく。

私の心理臨床にかかわった時間も二十五年近くなる

うとしている。児童学科の大学院に在籍中から、幸せで平穏な人達に殆ど関心がもてず、「不幸」で極限の状態にある人達の生々しさに触れる場をどこかで求めていた。縁あって精神病院の心理職に就けたのだが、閉鎖病棟の鍵を渡されたときの感触は忘れられない。人が人を拘束することへの畏怖と、とてつもない権力をこんな小娘が手にしているのだろうかという戸惑いで思わず震えてしまうほどであった。

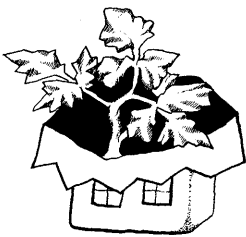
今になって思うと、あれが私自身の臨床の原点であった。そんな感覚を心の底に抱きながらいつも臨床・カウンセリングにかかわってきたように思う。そしていつも瞼に浮かぶのは、夕陽の差し込む畳敷きの精神病棟で、十年一日の如く壁を見つめて座っている患者さんの姿と、その部屋の空気の死のような静けさである。最後はそこに戻っていくのかもしれない、奇妙な懐かしさとともにいつも蘇ってくる光景である。

一昨年、十年余り室長を勤めた民間カウンセリング機関を辞め、原宿に開業しやつとスタッフ十人を抱えるまでにこぎつけた。原宿カウンセリングセンターの特色は「嗜癖」（アディクション）を主な対象とし、アディクションアプローチを基本とする技法を用いる点である。

嗜癖とは簡単に言えば「行動の悪習慣」を指し、わかつてはいてもやめられない、ハマってしまうことを言う。アルコール依存症をその代表とし、アルコール依存症治療から導き出された視点、方法などが嗜癖全

般についても適用できる。嗜癖は大きく分けて物質嗜癖（アルコール・薬物依存症、摂食障害など）、プロセス嗜癖（ギャンブル依存症、買い物依存症、繰り返される暴力、など）、関係嗜癖（共依存、愛しすぎる女など）がある。

私自身が精神病院勤務の中で一番関心をもったのがアルコール依存症だった。「アル中」という蔑称は仕事上は使わないが、親しみをこめて敢えて使わせてもらえるならば、多くの「アル中」の人達との出会いがなければ私の臨床活動はありえなかった。飲めば死んでしまう、もしくは飲めば家族を苦しめる……それがわかっていても飲んではしまう人達。入院中は「もう絶対飲みませんよ」などと優等生の発言をしていた人が、退院して自宅に戻る途中飲んで



病院にとんぼ返りする例は珍しくない。そんな、およそ治療効果や専門家の力など無意味なのは、と感じさせてしまうアルコール依存症が、私にとってはこの上なく面白いと思われた。その人間臭さ、ダイナミックな生から死への転換、そしてそこに見る自分の姿。アルコール依存症に惹かれてその治療の「業界」に集まってくる人達にはおなじような体臭を感じることはしばしばである。

もう一つアルコール依存症にこだわりつづけた理由がある。それは医師との関係である。精神科医療にあつて心理職はコ・メディカルという名の通り医師を頂点とするチームの一員である。大学院の恩師松村康平先生から常に言われていた「医師にできないことをする」という自らの専門性への問い掛けは絶えず仕事の中で意識の基本にあつた。アルコール依存症は「医師の無力」をその治療のスタートに掲げることで治療効果が上がるという実にパラドクシカルな病気である。治療モデルとして伝統的な「医療モデル」の限界

がいち早く提唱されたのも嗜癖問題である。そして人間関係こそがアルコール依存症の成り立ち、および回復にとって決定的であるという「関係モデル」がそれに代わって浮上した。「人間関係」にその専門性の基本を置けるということは、松村先生のもとの「関係論」を学んだ私にとってこの上ないことだった。それ以来、私の臨床活動は「関係の病理」としてのアルコール依存症からその家族へ、そして嗜癖問題へと広がりがながら今日にいたっている。

嗜癖問題は精神医療のなかでも、ごく周辺部分でありはつきりいえば異端といつてもいいだろう。まして私のような心理臨床家でアルコール問題、嗜癖問題を専門分野とする人などは日本中で十人いるかいなかではないだろうか。その少数者であることが前人未踏の道を行く快感にも似て私をこの領域にひきつけつけてきたと思う。

日本のアディクションの治療はアメリカをモデルにすると多い。アメリカのアディクションの治療

は三つのキーワードを生み出した。それは医療モデルの無効性が共有される中で、アルコール依存症本人たちから、そしてコ・メディカルの人々から生み出されたものである。決して医師から診断的に生み出されたのではない。

その第一は「自助グループ」である。どんな名医でも酒がやめさせられなかったのに、自助グループに参加し本人同志が自分の体験談を語るうちに酒がやまるという事実を示したのだ。これこそ治療者・被治療者という権威構造をひっくりかえすものだった。第二は「共依存」である。これはもともとアルコール依存症の妻のことを指すことばだった。夫の酒をやめさせようとしてさんざん世話を焼き、いつも夫の問題で頭が一杯な人達である。いってみれば、「愛情」から出た行為が結果的には本人の病気を支えてしまうという「愛情の無効性」「愛情ということばに潜むコントロール」を正面に打ち出すことばだった。このことばはその後アメリカで社会の病理を表すことばとして思

いもかけない展開をした。出発点がそもそも診断用語ではない曖昧さをはらんでいたため、それはしかたがないことだったのかもしれない。

第三は「アダルト・チルドレン」(ACと略す)である。これはAdult Children Of Alcoholicsの略で「アルコール依存症の親のもとで育ち成人した人」というものがもとの意味である。このことばは共存とほぼ同時期にアルコールの治療現場で生まれた。従来は飲んだくれの親のもとで育つ子は非行などの問題を起こすか、病気になるか、とにかくまともに育たないだろうという先入観をもたれていた。ところがむしろその子どもたちは「いい子」として親を支えて成長し、忘れ去られてしまうほど模範的な人として成長することをあきらかにした。そして何も問題はおこさないものの、ある種の生きづらさがかえるようになることに注目し、その人達をACと名付けたのである。

我が国にこのことばが導入されて十年近かった

が、ここ一、二年でマスコミを中心に流行語のような広がりを見せている。昨年、拙著『アダルト・チルドレン完全理解』（三五館）が出版されたのでこのコンセプトについての詳しい説明は本を読んで頂きたい。ここではA Cが何故キーワードなのかについて述べてみよう。

私のA Cの定義は「現在の自分の生きづらさが親との関係に起因すると認めた人」である。つまり、成人した自分に親からの影響を認めるのである。また自分の生きづらい対人関係は、親との関係を生き延びるために、原家族において適応するために身につけたものであって、わがままや性格のせいではないとする。これはA Cというコンセプトのもつ免責性である。そして生き延びるために学習し身につけたものであれば、それは再学習し変えることができるのだ。このように可変性も含まれる。

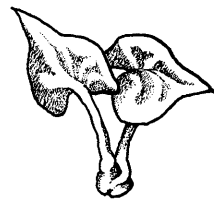
さらに一番重要なポイントはA Cとは客観的な基準があるわけではなく「自己認知」し「自己申告」する

ものであるという点である。

自分が苦しいかどうかという心的事実から出発するのだ。

客観的な検査、評価にどんな意味があるのだろうかを問い直し、心理臨床の原点の「自己認知」に立ち返ることばな

のである。自分がA Cと思って楽になったらA Cなのである。こんなシンプルなことがあるだろうか。このシンプルさが実は一番わかりにくいことらしい。近代知とは客観性に基づくものだとすれば、主観客観の二分法からまったく外れてしまうのがA Cコンセプトである。精神療法は偉い先生が診断面接をし人格の構造を……という枠組みから自由なのである。なにしろ自分のアイデンティティは自分で決めるのだから。またA Cの自覚をもった人達は従来の親子関係にまつわる常識を転換させた人達である。中年でも老年でも、親との関係が苦しい人は苦しいという気持ちを認める



のだ。親子の「愛情関係」が子どもの自分にとっては虐待でしかなかったという人がいたらそれを肯定するのだ。親子関係における体験の客観性、中立性とは実は「親の立場」に立つことではなかったのか。

成人してから親のことを悪くいうことは、我が国では「甘え」だったり、一笑に付されるようなことだった。敢えていうなら、親のことを成人してから批判非難することはタブーだった。ACとは何歳になっても子どもの立場に立つことを許すコンセプトなのだ。

「親からみればわがままな自分でしょうし、親不孝な冷たい子どもでしょう。でも自分が自分として生きるためにあの親を捨てたいのです」という人がいたら、捨てたいという気持ちをエンパワーするのが私の仕事である。「あなたはすこしもわがままじゃありませんよ」と言っている。

親と子の関係が双方が幸福という「幸福共同体」を形成しえなかった場合、つきつめれば親と子の関係は「支配・被支配」の関係なのである。そこでは中立は

ありえない。中立は必ず支配の側に立ってしまう。それはマルクスのいった資本家・労働者の関係、フェミニズムのいう男性と女性の関係と同じである。私達はAC自覚をもってカウンセリングに來た人に対しては苦しんだその人の立場、つまり子どもの立場に立つ。

このように私のカウンセリングは中立とか客観性とか相互理解といったことばかりは程遠いものである。私達の仕事の原点は「常識」を教え込むことではない。ひどい親だったら「ひどい親だ」と断言する。そうされることで初めて自分の親への感情を他者から承認してもらったと感ずる人が如何に多いか気づかされている。恐らく水面下では膨大な数ではないだろうか。

ACに対する批判のひとつに、昔から親子はそうだった、それなら国民皆ACじゃないかというものがある。親子の情愛がこれほどまでに強調されるようになったのは確かに近代に入ってからだった。私達が育つ頃は敗戦後の混乱期で子どものことなど構っていられなかった。しかしだからといって子どもは傷ついて

はいなかったのだろうか。生活苦、社会の混乱などという、より大きな困難の物語の中に、親との苦痛に満ちた物語を織り込むことで何とか折り合いをつけてきただけではなかったのか。

このように親子の愛情という神話に異議を唱える人達が中年期を中心に増えていることを、私は陳腐かもしれないが「人類の進歩」ではないかと思う。それは親から受けたことを自分の子どもとの関係で繰り返すまいという尊い決意の表れであろうと思うからだ。そして生活の安定、社会の安定が一定程度達成されて初めて、聖域であった親子関係に光が当てられるようになったと考えるからである。なぜなら、逆説的ではあるが、生活苦の中にあって一番の親の支え手は子どもだからである。

「親が子どもを支えるのであって、子どもが親を支えるのはヘンなんです」これは私がA Cの人達に繰り返していることばである。これを強調しなくてはならないほど、その人達は「親にとってみれば」、とか「親か

らみたら」、という親が主人公の物語の脇役としての物語を生きている。そして親を悲しませないようにし、こんな悪い子の自分という自責でつぶれそうになっている。実はこのような感情は援助交際の女子高生にも共通するものである。彼女たちはつぶれる代わりに、自分でお金を得る手段をみつけただけの話である。

幼少時から母と閉鎖的状況で生活し、母から期待と課題達成を課せられ、おまけに両親の関係性が情緒的に冷えきっている、しかし世間的には恵まれた生活で育った「いい子たち」。こんな若い人達が「お母さんを悲しませてはいけない」「自分はなんて悪い子なんだろう」と感じていることをほとんどの親は知らない。

先に述べたように、歴史のよりよい発展とともに浮上してきたのが、親と子のあいだに繰り返される「支配・被支配のドラマ」だと思う。A Cの本が出版されるまでは「自分の苦しみは、自分の性格のせいだ

とか自分が甘えているからだと考えていた」と殆どのクライエントが言う。

親になっただけで私達は社会的に承認される役割と、子どもへの行為を正当化できる権利を手にする。

それはやっと子どもという被支配の側から支配者の座に移れたことなのだ。親子関係を「家」でしばった時代から、家族愛・親子の愛という神話でしばるようになっただけの話かもしれない。しかし「愛情」という神話でしばるに足りるだけの、核家族の根幹である「夫婦の愛」が、決定的に脆弱であった。家族のほころびを露呈しつつあるのかもしれない。それは思春期の様々な問題の隙間から見え隠れする。摂食障害の女の子は例外なく両親の欺瞞に満ちた夫婦関係を指弾する。「愛し合った男女が結婚し家族を形成する」という近代家族のシンプルな原点を軽んじてきたことが、子どもから糾弾されているといえるかもしれない。この頃は親はお互い愛し合って、幸せでいることが子への最大の義務なのだと考えるようになっていく。

膨大な数のクライエントから、多くのことを聞く。それが私にとっては何よりの学習であり、指針を与えてくれるものなのだ。アディクションは、異端であつたからこそマージナルな地平から新しいことばを生み出した。このように現代にあつてぬくぬくと自分を鈍らせることも出来ず、違和感と苦痛を抱いて生きる人達のことばを聞くことは、幸いでもある。異端とは先端でもある。世紀末の不透明感漂うなか、そんな時間を「仕事」として与えられていることは、実にスリリングで楽しいこともある。

「私が楽しくなくっちゃ、それがクライエントの人達への義務なんだわ」とつぶやきながら、原宿の雑踏の中を急ぎ足で通りすぎる毎日である。

(原宿カウンセリングセンター)

乳児死亡率問題と 乳幼児健康相談事業

松本 園子

乳児死亡率問題

ユニセフの「世界子ども白書」（一九九七年版）によれば、一九九五年の「開発途上国」における乳児死亡率の平均は六七％（パーミル）、つまり、生まれた

子ども一、〇〇〇人のうち、六七人が一歳の誕生日を迎えずに亡くなっている。これに対して「先進工業国」の平均は七％、その一員である日本の場合には四％であり、世界でも最も低い乳児死亡率を達成している。

表1 我が国における乳児死亡率の推移

年次	乳児死亡率 (%)
1920 (大 8)	166
1930 (昭 5)	124
1940 (〃15)	90
1950 (〃25)	60
1960 (〃35)	31
1970 (〃45)	13
1980 (〃55)	8
1990 (平 2)	5
1995 (平 7)	4

とはいえ、表1の乳児死亡率の推移にみられるように、日本が今日のような低い死亡率を達成したのは最近のことである。乳児死亡率、幼児死亡率はその国、その地方の人々の生活水準のバロメーターであり、国はこれまで死亡率低減のために色々な対策を行ってきた。

とりわけ、乳児死亡率が大きな社会問題として取り上げられたのが大正時代半ばである。表2にみられる

ように、二〇世紀初頭までは欧米の先進国も乳児死亡率は高く、生まれた子どもの一〇人のうち一歳までに二人くらいは死んでしまう状況であった。これらの国では乳児死亡率がその後急速に改善された。ところが、日本の場合は、明治一九、二三年の五年間では一七%と、当時としては低かった死亡率が、その後だんだん高くなり、大正八年には一六六%となった。「先進国」の仲間入りを果たした日本の威信を傷つける問題であったのである。

乳児死亡率がなぜ高くなったのか

今日、開発途上国における乳児死亡率がなぜ高いのかについては、単純に「貧しいから」、「遅れているから」ということでは説明がつかない。それぞれの国の伝統的な生活、育児の在り方が、「先進工業国」の介入によって急変させられ——例えば粉ミルクが持ち込まれる等——それが、子どもたちの不幸をもたらした

表2 欧米各国及び日本の乳児死亡率比較 (%)

	イギリス	アメリカ合衆国	ドイツ	フランス	イタリア	オーストリア	オランダ	日本
1886～1890 (明19～23)	145	—	208	166	—	—	—	117
1891～1895 (明24～28)	151	—	204	171	—	—	—	147
1896～1900 (明29～33)	156	—	200	159	—	—	—	153
1901～1905 (明34～38)	138	—	191	159	168	214	133	154
1906～1910 (明39～43)	117	—	174	127	153	202	114	157
1911 (明44)	130	—	192	117	—	207	137	157
1915 (大 3)	110	—	—	—	—	—	87	160
1920 (大 8)	80	86	131	98	—	157	73	166
1924 (大12)	75	72	108	85	(1923) 88	—	51	163

注> 『乳児死亡の社会的原因に関する考察』(1922、大原社会問題研究所) および
『乳児死亡調査』(1928、愛知県社会課) 所載の資料により作成

ている側面も大きい。日本の大正時代の問題も、やはり、急激な産業化という社会的要因があったのではないだろうか。

大正半ばから昭和初期、乳児死亡率低減の方途を探ろうと、各地で多くの乳児死亡実態調査が行われている。その中で、大原社会問題研究所の暉峻義等らが、大正八年に東京府下八王子市で行った調査は産業化が母と子の生活に影響を及ぼしたという問題意識のもとに行われたものである。その報告書「乳児死亡の社会的原因に関する考察」では、当時この地域で盛んであった絹産業に従事する母親の子どもの死亡率が高いことを明らかにしており、乳児死亡率低減のためには働く女性の母性保護が必要であることを示唆している。

乳幼児健康相談所設置の施策

欧米諸国でも乳児死亡率低減に苦慮したが、その対策として試みられたのが「乳幼児健康相談事業」で

あった。それは、子どもの具合が悪くなってから診療するのではなく、健康な時に定期的に診察し、保護者に育児についての医学的指導を行うことによって、病气や死を予防するというものである。成り立ちや内容は、国によって異なるが、例えばフランスでは一八九〇年代始めの産科医の取り組みを契機に、産後の母親指導が組織的に行なわれるようになった。イギリスでは、一九〇四年に、「母親学校」という名称で相談所が始められ、子どもの保健相談のみならず、母親の健康や保育の実際的方法等の指導を行った。一九一八年に「母性及び乳児保護法」が制定されて、この事業が一層盛んになったという。これらは乳児死亡率低減におおいに貢献した。

こうしたことから、日本でもこの種の事業を実施しようという気運が高まった。その最初のものは大正八年設立の大阪市立児童相談所であるというが、明確な基準のないままに乳幼児健康相談所、児童健康相談

所、小児保健相談所等様々な名称の公立や私立の施設で行われていた。内務省発行の『本邦社会事業概要』

(大正十一年)には胎児、乳幼児保護の施設のひとつとして「児童健康相談所」があげられ、「健康相談所は乳幼児を始め児童の栄養、発育其他健康状態を検診し、母に対し育児上の知識を与へ、適切な指導を行ふを目的とし、医師及び看護婦を置き一定の時日に母をして児童を伴ひ来らしむるなり」と説明されている。

このころ、国としてもこの種の事業に着手する動きがあった。つまり、内務大臣の諮問機関である保健衛生調査会が、「乳児及幼児の死亡率低減に関する方策如何」という諮問に応えて、大正十五年に乳幼児健康相談事業を行う小児保健所設立案を答申した。ここでは特に保健婦による家庭訪問が重視されている。これを受けて内務省はまず大都市において、「小児保健所」を設置する準備に取り掛かったが、この構想は結

局予算上の問題で実現をみずに終わった。

戦時下の昭和十二年、保健所法が制定され、国民の体位向上のための行政機関として保健所が設置された。業務として「妊産婦及乳幼児の衛生に関する」指導も掲げられるが、先の小児保健所構想ほどに、きめ細かく乳幼児の健康に取り組むものではなかった。

東京府の乳幼児健康相談事業

各地で様々な形で、乳幼児健康相談事業が行われたが、大正十一年に始められた東京府の事業の状況をここで紹介してみたい。

当時、この種の施設は既に全国に数十か所あったが、必ずしも十分な成果は挙げていなかった。一般に、とりわけ貧困層の場合は子どもが健康な時にわざわざ相談所に足を運ぶ親は少なく、相談所は具合の悪いときに病院がわりに駆け込む、というものになっていた。

これでは事業本来の目的は達成できない。そこで、東京府社会課乳幼児係は従来の健康相談事業の難点を補い、かつ健全なる育児の思想を普及しようと、スラム街であった芝区新網町に家庭訪問を重視する新しいタイプの健康相談所を開設した。府の乳幼児係員七名が家庭訪問員となり、日赤病院小児科の医師が健康診断を行い、この地域で託児所を経営していた大正婦人会が健康相談所を開設し、三者の協力で事業が行われた。来所を待っているのではなく、母親をこの施設に招き寄せ医師の科学的指導を受けるようにと、三歳以下の乳幼児のいる家庭を毎週一回健康訪問をして健康状況の観察を行ったのである。前述の小児保健所構想に先んじた訪問重視の取組みであった。この試みは相当効果をあげ、さらに拡げようと計画していたところ、東京は大震災にみまわれた。

関東大震災（大正十二年九月）は乳幼児健康相談事業拡大の契機となった。震災後の生活の激変は乳幼児

の健康状態を一層悪化させたが、東京府は、千駄ヶ谷及び小石川植物園の罹災者収容バラックで乳幼児健康相談事業を行った。その様子は『児童研究』誌によれば次のようなものであった（大正十二年十二月号）。

東京府社会課乳幼児係に於ては、十一月十四日午前十時より、東京市外、千駄ヶ谷罹災民収容所に四歳以下の乳幼児のある家庭を訪問し、引続き午後一時より田中医学博士の健康診断を行ひたり。その成績を見るに異常なきもの五一・九五%、消化不良一九・二三%、感冒一五・三八%、気管支加多留一一・五四%、其他三・八四%なりしと。因に、検査人員は五十二名で、「バラック」にあり勝な咽喉に関するものが非常に多いので、近く吸入をなす設備をする筈なりと。

本相談所には、家庭を訪問する委員が七名附属してゐて、その家庭で母に尋ぬる事項は、母の健康否、病人の有無、栄養物、食欲の増減、嘔吐の有

健康相談の実際

東京府の乳幼児健康相談事業は外郭団体の東京府社会事業協会に委託され、協会経営の各隣保館の事業として行われた。

協会の相談所については対象地域の三五〇戸に対して一か所設置が標準であり、ここに乳幼児がほぼ二五〇人位あり、一回の相談日に二、三〇人来所する、というのがおよその目安であつた。乳幼児のいる家庭を週一回訪問し、必要な場合は相談所で医師の指導をうけるよう勧めるわけで、その際、大正十一年以来の図のような健康訪問カードが使用された。全家庭を毎回

東京府社會課乳幼兒係

[illegible]

▲図 東京府社会事業協会会報25号 (大正13年12月)

まわるわけではなく、特に必要のあるものについて常時訪問家庭として重点的に指導したようであるが、常時訪問も各館百〇二百家庭かかえており、相当なエネルギーを要したことであろう。ある訪問員は次のように仕事の一端を語っている（『社会福利』昭和五年一月号）。

私は社会事業協会の南千住隣保館の訪問員を永らく勤めてゐるのですが、訪問してゐる間には種々と難かしい問題に遭遇し私共の責任の重大さを感じることが御座います。最近訪問して発見したのに三才になって歩けないといふのがありまして、両親はこの子が躓者ではないかと心配して居りました。調べてみますと兄弟が皆夭死してゐます。商売が飴売なので家内に縛りつけて商ひに出るのださうで、又外聞が悪いので外には一切出さないでゐるのださうです。それで私は或は日光浴が足りない故かとも思ひましたが、兎に角相談日

に來いといつて其の日は済みました。審査の結果は少し歩く稽古をさせてもらふと云うことになりましたが、聞けば今迄歩けないから危ないと思つて歩かせてみたこともなかったといふのです。翌日から歩かせてみたら独りでは駄目だが手を添えると少しは歩けるやうになったさうです。

……

＊

大正時代に始まつた乳幼児健康相談事業は、今日の保健所における乳幼児健診や訪問指導に引き継がれていふと言つてよいだろう。健診は子どもたち全体の健康を守る場であるとともに、障害の早期発見や、家庭内の虐待問題の発見と援助の場になるなど、今日的な子どもの福祉問題に対応する第一線となっている。

（淑徳短期大学）

遊びへの参加とことば

榎 沢 良 彦

はじめに

わたしたちは、子どもであろうが大人であろうが、直接的な相互交渉の場面では、身体全体を用いてコミュニケーションを行っています。ことばも身体から発せられますから、身体によるコミュニケーションの一部をなしています。この身体によるコミュニケーションのなかでも、ことばによるコミュニケーションは、やはり大きな比重を占めていると言えます。子どもたちは一緒に生活していくことで、自分の欲求の赴くままに、相手の意思にはお構いなく行動するのではなく、まず、自分の欲求や考えをことばに表して相手に伝え、相手の考えを確認するという仕方でかわり合うようになっていきます。そして、子どもたちは、「相手に交渉するための手段としてのことば」の使用に習熟していきます。

園生活のなかでは、子どもたちは相手と交渉する必要がある場面によく出くわします。他の子の使っている遊具や玩具などを使いたいとき、あるいは遊びの仲間に加

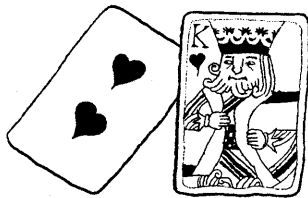
やりたいときなど、子どもたちは相手と交渉しなければなりません。そういう場合、わたしたち保育者は、自分の意思をはっきりことばに表現して相手に伝えるように指導します。そして、保育者の助けを借りずに、子どもが自分の力でそうできるようにしていくことを期待しています。

多くの子どもたちは自分の力で相手と交渉するようになっていきます。しかし、この相手と交渉するということは、かなり心理的な負担も大きく、容易なことではありません。まだ友だちとあまり親しくなっていない子や、内向的でおとなしい子の場合、友だちのしている遊びに加わりたくても、なかなかその気持ちのことばに表現できず、いつまでも周辺から見ていることがよくあります。そのようなとき、わたしたちはその子が遊びだせるように、なんらかのことばをかけてやります。そのことばかけの性質により、即座に子どもが遊びはじめられたり、いましばらく遊びを躊躇することもあります。日常、保育者はおおむねうまく援助しています。しかし、

自分の行っている働きかけが、一体どういう性質のものであるのか、十分明確に自覚できているわけではありません。

実は、ことばはコミュニケーションの手段であるだけではありません。ことばは意味のある世界を生み出し、また変容させます。意味のある世界を生活している人間は、そこにある意味を見ていることにより、その世界に対してある態度をとり、そしてある関係を結びます。したがって、子どもたちの関係が変わることには、子どもたちの生きている世界の変容が伴って起きていると言えます。

遊びに加われないでいる子を、遊びに入れるように保育者が援助しているとき、あるいは、子ども同士がかかわることで遊びの仲間になるとき、



単に社会的スキル、あるいはコミュニケーションの手段としてことばが使われているわけではありません。本稿では、世界の変容という観点で、他者に対して発せられることばを考察し、保育者の援助のあり方を考えたいと思います。

一、保育者の援助によって子どもが遊びに加わる

事例一 こぶたとおおかみの遊びに参加できずにいた

A子とB男

(一九九六年九月一二日)

三匹のこぶたの話聞いた三歳児たちが、保育室で保育者とこぶたのお面をかぶって遊んでいる。その遊びに関心はあるけれど、仲間に入れないでいる子が何人かいる。A子もこぶたのお面をかぶっているが、仲間に入っていない。やがて、お面を外し、手で持っている。特に遊んでいるというふうでもなく、テーブルに肘をついたりなどしている。そのお面も片づけてしまい、何となくフラフラと室内を歩き回り、I先生と子どもたちの「こぶたごっこ」を見て、ニコニコしているが、やはり仲間

に加わってはいかない。

B男も、I先生と他の子どもたちがふざけ合っている様子を見ている。I先生たちが保育室から出ていってしまうと、B男は独りで椅子に座っている。おおかみに扮したT先生が、他の子どもたちと遊びながら保育室に入ってくる。子どもたちはT先生をやっつけようとしている。B男はT先生に近づき、何かを差し出す。T先生がそれを飲む真似をすると、B男は「それ飲むと元気になる」と言う。即座にT先生は「元気になった!」と答え、B男に襲いかかる。B男はおおかみに食べられまいと、逃げる。そして、素材置場から卵のケースを持ち出して遊ぼうとする。ところが、T先生が他の子どもたちとふざけ合っているうちに、B男は先程のように、その遊び仲間から離れてしまう。

やがて、I先生もT先生も子どもたちと広間のほうに行ってしまう。保育室にはA子を含んだ数人の女児だけが残る。彼女たちは畳のコーナーで「お家ごっこ」をしている。A子はその家のなかにいるのだが、ただ黙って

お家ごっこの様子を見ている。そこにI先生が「ただいま」と言って戻ってくる。

I先生はA子に「Aちゃん、窓から何が見える?」と話しかける。A子は黙ったまま気恥ずかしそうに微笑む。そして、I先生の話しかけに答えるように、窓から外を覗いてみる。I先生が子どもたちに向かって「おおかみが来るかもしれない」と言うと、子どもたちは「大変だ」等と口々にいい、遊びが盛り上がる。A子も笑い声を上げ、完全に遊びのなかに入っている。誰かが「おおかみが来るぞ」と言うと、皆「キャー!」と悲鳴を上げる。おおかみに扮したT先生がやって来る。A子はすっかり楽しそうな表情になっている。そして、I先生に「おおかみがいた」と教えたりする。

この子どもたちと保育者が展開した「こぶたとおおかみの遊び」で、多くの子どもたちは互いにかかわり合い、楽しんでいました。ところが、A子やB男など、何人かの子どもは遊べてはいませんでした。A子は、特に

何かをすることもなくすごしていました。しかし、I先生たちの「こぶたごっこ」には関心があり、見ていました。A子は自分も「こぶたごっこ」をしたいのだけれど、仲間に入れないでいたのです。B男も同様でした。B男もやはり友だちの遊びに関心があり、近くで見ているし、ついて回ってはいるけれど、いま一步仲間に入りきれないでいました。A子もB男も「遊びの部外者」の立場ですごしていたのです。この二人に対して、I先生とT先生はある働きかけをしました。

「こぶたの家」のなかでI先生と女兒たちが遊んでいたとき、A子もその家のなかに入りました。一見すると、一緒に遊んでいるようですが、A子だけは他の人たちとは違う在り方をしていました。他の人たちは「遊ぶ在り方」であるのに対して、A子は「傍観者の在り方」をしていました。そのA子にI先生が「窓から何が見える?」と話しかけてやったことで、A子は笑顔を見せ、「遊ぶ在り方」に変わっていききました。

B男も、遊んでいる友だちの周辺をうろつくというよ

うに、「傍観者のな在り方」をしていました。しかし、B男もしだいに遊びに加わりたい気持ちが強まってきたのでしょう。こぶたたちにやつつけられているT先生に力をつけるものを差し出すというように、自らT先生にかかわっていききました。このB男からの働きかけに対して、T先生は即座に応え、おおかみとしてB男を襲う真似をしてやりました。すると、B男は食べられまいとして逃げるというように、「おおかみこつこの仲間」としての行動をとりました。このとき、B男は「傍観者のな在り方」から「遊ぶ在り方」になったと言えます。

このように、二人の保育者は、A子とB男の在り方を、「傍観者のな在り方」（遊べない在り方）から「遊ぶ在り方」に変えました。おそらく、この二人の保育者は熟慮した上で子どもたちに働きかけたと言うよりも、瞬間的に、直観的に働きかけたのでしょう。しかし、それが子どもたちの在り方をそれまでとは違うものにしてしまったのです。

二、子どもが自分の働きかけて遊びに加わる

事例二 R男の家に自ら入ったA男

（一九九六年十月四日）

広間で多くの子どもたちが色々な遊びをしているなかで、R男は一人ですっと組木を使って「塔」のようなものを作っている。彼は、最初、短い木を使っていたが、やがて長い木を使いだし、構造物が大きくなっていく。どうやら「家」を作っているらしい。私はR男の側にしゃがんで見ている。すると、他の場所で遊んでいたY子が私のところに来て、「これあげる」と言ってキャンディをくれる。それを見たA男が「何、それ」と言って寄ってくる。三人でやり取りをしているあいだも、R男は黙々と製作を続けている。

U先生がR男の許に来て、一緒に遊びだす。U男は自分で作った家のなかに入っている。さっき私にかかわってきたA男がまたやって来て、R男とU先生のやり取りを見ている。そのうち、A男はR男の作った家に組木を

付け加える。R男は、さっき自分の相手をしてくれていた担任のS先生をつれてきて、家のなかに入らせる。そして、自分も入り、S先生と楽しそうに会話をする。側で他の女兒たちと話をしているU先生も、腕を引いて家のなかに入らせる。三人で楽しそうに遊ぶ。A男は私と会話をしながら三人の「お家ごっこ」を見ている。そして、自分から「ごめんください」と元氣良くR男に言う。すると、R男は「ここが入口」と入るところを教え、A男を家に入れてやる。R男はお化け屋敷に行こうと、S先生を誘い、出ていく。家のなかにはA男とU先生が残り、二人でゴムボールを転がしたりして遊びはじめる。

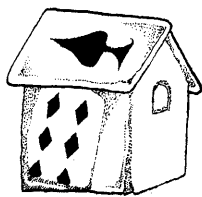
この事例で、「家作り」と「お家ごっこ」の主人公はR男でした。彼は熱心に「家作り」をしていましたし、「お家ごっこ」も保育者と楽しんでいました。

一方、A男はどうでしょうか。彼は最初、R男の遊びに関心はありませんでした。彼は先ず、Y子と私のやり

取りに気を引かれ、私にかかわってきました。R男の側にいた私とかかわったことで、A男はしだいにR男の遊びに注意を引かれていったのでしょう。A男はR男とU先生のやり取りを興味深げに見つめるようになりました。このとき、A男は「R男たちの遊びの部外者」として、自分を意識するようになったと言えます。

A男はR男の家に組木を付け加え、それをR男は受容しました。それゆえ、A男は「R男の遊びの当事者」になっっているように見えます。しかし、この時点では、A男はまだ「当事者」ではありません。A男は家の外にいます。A男は、R男がS先生やU先生を家に引き入れ、楽しく遊んでいる様子を、外から見ていることしかできませんでした。遊び

の当事者になりたい気持ちが強まったA男が「ごめんください」とR男に声をかけ、R男がA男を家に入れてやったとき、A男は「遊



びの当事者」になりました。それゆえ、その後は、A男はその家があたかも自分の物でもあるかのように、少しの遠慮もなく、堂々とU先生と遊ぶようになりました。

三、他者との関係を変えることば

以上の二つの事例のなかで共通して起きたことは、子どもたちの関係の変化です。A子と「こぶたごっこ」をしていた者たちは、最初は「遊びの当事者―部外者」の関係にありました。B男と他の子どもたちの関係も似たようなものでした。その関係が「遊び相手同士」の関係に変わりました。R男とA男の関係も同様です。この「遊びの部外者」が「遊びの当事者」に変わるという出来事が生じる上で、重要な働きをしたのは、「ことば」です。そこで、この出来事のことばがどのような特質を有しているのかを考えてみましょう。

「こぶたごっこ」の場面で、I先生はA子に「窓から何が見える？」と話かけました。このことばは、I先生

がA子を「こぶたごっこ」の仲間」として見なしていることを意味しています。もしも、I先生が「A子ちゃんもこぶたさんになる？」等と話かけるとすれば、その場合は、A子が遊びの部外者であることが前提にされていることになります。そうすると、A子は先ず、「自分と他の子どもたちとの間の溝」を意識させられることになります。それを意識した上で、飛び越すことになります。勿論、その溝は、それまでよりは容易に飛び越せるものになっています。それに対して、実際にI先生がA子にかけたことばは、A子と他の子どもたちとの間の溝を消滅させてしまっています。ですから、A子は仲間に入るための手続（例えば、頷くこと）をする必要はなく、自然に仲間としての行動をすることができます。

「おおかみごっこ」の場面でも、基本的に保育者は同様のほかわり方をしています。B男がT先生に何かを差し出したとき、彼はまた、「おおかみごっこ」の仲間」として行動していたわけではありません。B男はT先生をも含めた他の者たちとの間に「溝」を感じていました。そ

のB男に、T先生は「元気になった」と言って襲いかかりました。このT先生の応答は、もう既にB男が「おおかみごっこの仲間」であることを前提にしている応答です。したがって、B男は他の子どもたちと同じように、「おおかみごっこの仲間」としての行動をとってしまうのです。

では、R男がしていた「お家ごっこ」に加わっていたA男の場合はどうでしょう。A男はR男に対して、「仲間に入れて」と頼んだものではありません。子どもが「仲間に入れて」と言う場合、明らかに自分が「遊びの部外者」であることを前提にしています。したがって、相手と自分との間に溝があることを意識していることとなります。同時に、このことは相手にも溝の存在を自覚させることになります。

ところが、A男が実際に発した「ごめんください」ということは、既にA男自身が「R男の遊びの仲間」であることを前提にしています。A男は交渉という手続きを経ずに、「いきなり自らをR男の遊びの世界に組み込

む」という仕方です。R男に働きかけていったのです。R男の方も、その働きかけが自分の遊びの世界に位置づく働きかけなので、自然に受け入れる仕方です。応答したのでしょう。

以上のように考察してみると、保育のなかで発せられることばには、「両者の世界の相違・立場の相違を意識させることば」と「両者の世界の相違を意識させないことば（両者が同じ世界を生きていることを前提にしたことば）」があることがわかります。後者のようなことばは、遊びへの参加を容易なものにしてくれると考えられます。

（富山大学）



対策ではなく、 本人の必要を

津守 真

子どもにも家庭にも、ある時期、たいへんなときがある。たとえば、夜になっても母親と外出したい子どもが私の養護学校にいた。その時期が長くつづき、家族も疲れ切った様子で、職員たちは何とか手助けをしたいと思った。保育が終わってから、どうしたらよいか、長い時間をかけて話し合った。話しているうちに、職員がどのようなローテーションを組んだら無理なく助けられるかということに気が奪われてしまっ



た。そんなとき、きつと、だれかが「これはへんじゃないか」とことを差し挟んだ。「みんな、対策で頭が一杯になって、子どものことを考えていない」という発言に、私共ははっとさせられた。子どもの側に立ってみればどうなのか、周囲が大変なときには一番悩んでいるのは子どもに違いない。子どもは何を困っているのか、何を表現しようとしているのか。それこそが皆で考えを出し合わねばならないのではないか。それに気が付いたとき、私共の議論の方向も、対応の仕方も変わった。

同じようなことを、私はいま大人の福祉の場で経験している。どうしてもひとりで外に出掛けたい男性がいる。夜中や明け方に出て行く。いつ出て行くか分からないので、職員は目が離せない。こんなとき職員の議論も、外に出て行かないための対策になりがちである。本人の側から見たときには、絶えず見張られている生活で不愉快であるに違いない。ひとりの職員が、これはどうしても地域のホームの生活をしなければ根本解決にはならないから、自分が引き受けようと言った。そして数か月間休暇もとらないで、その人との生活をし、その人の求めている生活を理解するよう努力はじめた。しばらくして、この男性はもはや人の目をぬすんで外出することはなくなり、ひとりで留守番をしても安心な状態になった。その途中で何度も、ホームをどうやって運営するか、財政はどうするかという議論があった。そう考えていると、また



対策に終わってしまい、その人が何を必要としているかということが抜けてしまう。

私共の議論の輪の中に米国で勉強している最中の若い人が加わっていた。私は現在の米国の福祉の専門の人達だったらこのような場合にどうするかを尋ねた。米国だったら、本人にとって何が必要かを関係者が集まって討議する。そしてその人にとって望ましい生活をどうつくるか、目標が決まったら、それを達成するために皆で邁進するという。そうすると何年かたつうちにそれができてしまう。日本だと最初の段階で、それは理想論だという話になって先が進まない。何をするにしても財政基礎が必要なことと言うまでもない。経済も人間も、どちらも大切なことはだれもが分かっている。しかし人間の福祉と教育の分野では、決定の決め手を、子ども最優先、人間最優先（ビーブルファースト）にするかどうかが問われる。紙一重の差で最終の決定をどちらに賭けるかによって先は全く違ってしまう。現在、日本の教育が当面している問題もこれではないか。

ある日の育児日記から

(86)

佐藤 和代



有の手がかさかさに荒れて、血がにじむようになってしまいました。病院で診てもらうと、先生はひとこと「アトピーですね」。

そうかあ、有も出たか。圭は赤ん坊の頃アトピーと言われていました。やっぱり体質は似るのかな。ともあれ、もらってきた薬を手足に擦り込みます。「ここもかゆい」「こっちも塗って」あっちこっち塗っていると、何となくうれしくなってくるのが不思議。圭が小さいころ、やっぱりこんなふうに薬を塗って、そのまま裸で遊ばせたっけ。このごろ、あまり子どもの体にさわることもなかった。

小さいうちはいつも肌にあふれていたのにね。最近、圭も有もスキんシップが足りなかったかな。

保育園の先生に「子ども

もが病気になるったら、頭に手をあてたりぎゅっと抱いたりして、いっぱい心配していいんです。子どもなんて、そうしてほしくて病気になるようなものだから」と言われたことがあります。もしかしら、五歳になって急にアトピーがでるなんて、「お母さん、もうちょっとボクにさわってよ」ということなのかしら。

軽いアトピーだからのんきなこと言っていられるのだと思うけれど、薬を塗るたび、ついでにちよつとくすぐって遊んで、二人で楽しんでしまってます。



特集 へ育てるく

マラリア原虫を育てる

渡辺

純一



医学研究者には、奇妙な性癖があつて、自分が研究している病気で亡くなる人の数を誇るようなところがある。重要性を強調するあまり、研究の目的を忘れてしまうのである。

最近にいたるまで、開発途上国の乳幼児死亡の最大の原因は下痢症であつた。かつて日本でも流行を繰り返した赤痢や、コレラ、アメーバ、様々な病原

体が引き起こす重症下痢が多数のいたいけな子どもを命を奪っていた。ところが、ポカリスエット療法の普及によつて救命率が格段に向上した。少量の塩と砂糖を溶かしたきれいな水を口から補給することで、下痢による死亡者が減少したのである。ごくわずかの塩分と糖分が腸からの水の吸収を促進し、点滴と同じ効果が得られる。その結果、下痢症の専門

家は自慢の種を一つ失い、栄誉はマラリア研究者に回ってきた（ボカリスエットは、等量の清水で希釈して飲ませた方がよい）。

マラリアと言えば、熱帯地方でハマダラカに刺されると感染する病で、高熱が数日続くうちに昏睡に陥り、適切な治療をうけないと死に至る恐ろしい病気というのが通念であろう。ところが、熱帯の実情は、異なる。アフリカでは赤ん坊は生後六か月を過ぎる頃からマラリアにかかり始め、二、三歳に達する前に全員が感染する。小児のマラリアは重症化しやすく少なからぬ子どもが死亡し、そうでないものも貧血のため発育障害を来す。生き残ったものは次第に抵抗力を獲得し病気をかかえたまま成人する。流行地では、新生児を除いて全員がマラリアにかかり何らかの形で被害を受けている。

マラリアの病原体が発見されたのは一八八〇年のことである。赤血球の中に寄生する病原微生物は、形が不整形でプラスモディウムと名付けられた。ア

ーバやゾウリムシと類縁の原生動物に属する。体は一個の細胞からできていて文字どおり単細胞、人間よりはるかに下等な生物である。微生物学の研究は、病原体の発見で始まるが、その発展には、病原体の純粹培養が必須である。約一〇〇年前結核菌を発見したロベルト・コッホは、寒天培地を発明し、菌の純粹培養にも成功して近代微生物学の父と呼ばれた。ところが、マラリア原虫の培養は最近までうまくいかなかった。成功したのはわずか二十年前のこと、ベトナム戦争で多数の将兵にマラリアの被害を出した米国が巨額の研究費を投じた結果のことであった。ロックフェラー大学のトレーガー博士が、ろうそくを用いて培養法を確立したのである。容器に火のついたろうそくを入れ密閉して火が消えるまで待つ。この中にヒトの赤血球、血清、培養液を入れてやると、原虫がぐんぐん育つようになる。二日で十倍に増加する。一個の原虫が一月の間に千兆倍になる計算で、大人の体重に匹敵する。これでは患

者はたまらない。実際実験をしても増えすぎて処分に困るほどである。トレীগー博士が原虫を手懐けた秘密は、空気中の酸素を減らすことであつた。しかし、これは、別に新しい発明でも何でもない。ずっと昔から酸素が苦手な嫌気性細菌の培養に使われていた方法であつた。一九七六年の培養法の発明によってマラリアの研究は文字通り加速された。もし、将来本当に有効なマラリアワクチンが開発されたなら、博士は間違いなくノーベル賞に輝くであろう。

さて、数年前、私にもようやく留学のチャンスがめぐってきたとき、縁あってアメリカの片田舎の小さな大学に出かけることにした。トレীগー博士から直接指導を受けたというインゼルバーグ教授からマラリアの培養法を学び本格的に研究するよい機会だと思つたからである。当時、日本のマラリア研究者は層も薄く、研究費もわずかだった。教授自ら細かに培養法を指導してくれた。博士の発表の後様々

な改良法が報告されたが、やはり、元のろうそく法が一番だったとかで、研究室には料理用のろうそくが何十本もころがっていた。やがて、マラリア原虫が育ちはじめてみると、成長が速いだけに栄養もたくさん必要で、老廃物も大量にでる。新陳代謝がさかんなため毎日培養液を取り替えねばならない。半日でも液替えが遅れると原虫の具合が悪くなる。一日でもさぼるとときめんである。三年間の留学期間中短い旅行の間を除いて私は毎日研究室に通い、毎日原虫の世話をし、ときどき、実験に使つた。週末には、幼稚園生の娘たちが付いて来て、培養液を交換している間絵を描きながら待っているという生活が続いた。

帰国後、マラリアの培養を始めるのが一苦勞だった。アメリカではあんなにうまくいっていたのに、まったく同じようにしても原虫は増えてくれない。培養を開始した翌日には、形態が変化し始め、二、三日もするとすっかり元気がなくなってしまう。一

週間後、顕微鏡で見えるのは累々たる原虫の死がいである。培養液を作る蒸留水の品質を確かめたり、孵卵器の温度を調べたり、密閉容器の空気漏れをチェックしたり、半年かかって培養に成功した。私は、この時初めてトレーガー博士の苦勞の一部が分かるような気がした。創始者は、あらゆる可能性を検討するために、数限りない実験を行うのである。また、博士が、世界各地で講習会を開き培養法を指導して回った理由も理解できた。実験では、文書に書ききれない細かな操作と工夫が大切で、それは、実地に直接指導しなければ伝えられないものである。

培養は、英語ではカルチャーという。栽培のことである。確かに培養は、農業に似ている。適当な栄養と温度が与えられるとマラリア原虫は本当に気持ちよさそうに育ってくる。彼らののびやかな形態を眺めていると、病原体であることも忘れて私の気分まで晴れ晴れとしてくる。実験以前に生き物として

の共感というか喜びを感じてしまう。暗い密閉容器の中で黙々と増殖を続ける原虫は健気ですらあり、原虫を回収して実験に使用するときには彼らへ感謝を覚える。

しかし、彼らが本来の速度で増殖し始めるのは、必要条件がすべて整ったときだけである。ひとつでも条件が悪くなると成長速度が低下する。もの言わぬ生き物の気持ちを理解して彼らの過ごしやすい環境を整えるには、毎日様子を観察して毎日面倒をみるのが一番である。操作はなるべく手早く行い、原虫に障害を与えないようにする。すると、原虫は本来の生命力に従って恐ろしいほどの成長と増殖を示すようになる。マラリア原虫を育てるといっても、実は、環境を整えて生き物が育つのを待つのである。よい環境を用意できるかどうか、実験の正否はそこにかかっている。子育てと同じではないだろうか。

(東京大学医科学研究所)

小さな命を見つめて

高柳 芳恵

継続して一つの生きものをみることは、おそらくおもしろいことはありません。樹でも草でも昆虫でも、時間をかけていねいに観察していると、思わぬ発見があり、心ときめくことが多いものです。これまでいろいろな昆虫を卵から成虫になるまで育てたり、種から植物を育てたりしてきましたが、そのたびに、

どの本にものっていない、親しくなったものだけに、見せてくれる姿に出会いました。それが嬉しくて、野山の生きものを育ててきました。そして、親しみをもつ生きものがたくさんできればできるほど、

“自然との一体感”が感じられ、自然を身近に感じ、そして大切に思うようになりました。

ところで、昆虫などの生きものを、室内と同じように、自然の中でじっくりと継続して観察しようとしたら、大変なことです。でも、もし、自然の中で何か月か同じ所において、いつでも会える昆虫がいたら。そして、遠くに出かけなくてもいいとしたら……。そんな生きものに出逢って、十年。“冬を生きる蝶”を通して心の中に育っていったもの、それは“命をみつめる眼”でした。



▲葉の裏で冬越しをする蝶
“ウラギンシジミ”

その蝶の名はウラギンシジミ。モンシロチョウより少し小さく、その名のおり羽の裏が銀色をしています。成虫のまま冬を越す数少ない蝶の一つで、不思議なことに、風雨にさらされたまま葉の裏で冬越しをします。そのため、春まで生き残れるのは、ほんの数パーセント。力尽きて落下したり、葉に止まったまま死んでいたり、鳥に食べられたりと、まるで死亡確認調査のようで、自然の厳しさをひしひしと感じます。雑木林の他に、住宅地や公園、緑地など町中の常緑樹にもいるので、案外人目につきや

すいのですが、ほとんど知られていません。

最初の年は、小学三年生の娘と一緒に観察しました。十二月から約四か月、雨の日も、風の日も、雪の日も通いました。羽についた水滴が凍りつきそうに寒い日もありました。十五匹ほど見つけたものの、次々いなくなり、「昨日までいたのに」とがっかりする娘。遠くから葉間に銀色がチラッと見えると、うれしくて思わず顔を見合せてしまいます。春も近いある晴れた日、たった一匹残ったウラギンに太陽があたり、銀色の羽がきらきらと輝いていました。こんなに目立っていいのかしら、と心配する私に、娘が、「ママ、ママ、きいて!」と言ってこんな詩を口ずさみました。

どうしてそんなにきれいなのか？
わたしのひかりをあびたから？
それならもっと　こんどから
やさしくしましょう　ひのひかり
「これね、『おひさまからのメッセージ』って題に

するの」。さらりと娘の口からでてきた言葉を味わいつつ、共に小さな命を見つめてこられた幸せをしみじみと感じました。

ウラギンシジミの越冬はこれまで、「葉裏に止まったまま休眠し、なにも食べない」と言われていました。しかし、何年も続けて観察しているうちに、そうではないことに気づきました。ある時、手を近づけてみると羽を動かして威嚇したのです。飛んで逃げるのができない蝶の精一杯の抵抗だったのでしょう。また、いつもは四本の脚の爪を葉にしっかりとくこませて止まっているのですが、風が強くとくと、たたんでいた前脚二本をさっと出して体を支えることも分かりました。また、雨上がり、葉裏にたまっている雨水を、口吻を長く伸ばし、身を持ち出すようにして飲んでいたこともありました。こうした発見が増えるにつれ、ウラギンシジミがとても愛しいものになってきました。一見「静

に見える生き物が、環境に合わせて必死に生きている力強さをもっていることが感じられ、小さな命がますます重みをもった命となっていきました。

また、ウラギンシジミは人間が創り出した環境の中で生きているため、人間の都合で命が左右されるような場面にもたびたび出会いました。開発によって住む場所が根こそぎなくなることもあるし、植木の剪定による犠牲も大きなものでした。農家のモチノキの太木に止まっているウラギンシジミを見に行った時のことです。ぱっさりと枝が切り落とされ、そばで焚き火の煙がもうもうとしていました。ウラギンシジミがいた枝がないとあわてて探すと、地面に落ちています。手のひらにのせると、やがて手のぬくもりで羽を広げました。持ち主の方に蝶を見せて話をしたところ、へえーと驚かれながらも、「息子はもうわしの仕事をひきつがないので、木の手入れをする人もいない。だから思い切って伐らねば大きくなりすぎて困るんだ」と話されました。

観察を始めて七年目、待ちこがれた瞬間がきました。越冬に成功したウラギンシジミの飛び立つ瞬間を見ることができたのです。その蝶を見つけてから百二十四日目、彼岸過ぎの暖かな朝のことでした。

胸騒ぎを覚え出かけてみると、それまで羽の間にしまっていた触角を盛んに動かしています。そのうち、頭をぐるぐる回したり、脚を動かしたりし始めました。やがて葉の表側によじ登ろうと脚を葉のへりにかけるのですが、脚が萎えているのか、二、三度失敗します。ようやく葉表に立ったものの、よろける始末。やがてしっかりと立って羽を広げ、太陽で体を温め、エネルギーをもらうと、飛び立っていききました。ふと、主のいなくなった葉を見ると、爪の跡が四つ、しっかりとしみになって残っていました。あの小さな脚で厳しい冬を乗り切ったことを考えると、胸がいっぱいになりました。その年の観察ノートには、次のような言葉が残っています。

「十二月三日に発見以来、実に百二十四日間、風に

も、雨にも、雪にも、そして公害にも負けず、頑張り通した慎重派ウラギンに乾杯!! 今冬見つけた四十七匹全てのウラギンがいなくなり、四か月間の調査が終わった。越冬調査とは、死亡調査のようなもの。数え切れないほどの「死」に直面してきた。昨年は、葉に脚を一本残したまま力尽きて葉から落ちていくのを目撃した。友人が言った。『あなた、よく直視できるわね』と。しかし、苛酷な冬から逃げずに、能動的に生きていくウラギンの力強さに惹かれている私、また、春元気に飛ぶ姿を見て命が引き継がれたことに安堵している私、そして、ウラギンから生きるエネルギーをもらってきた私を、私自身を知っている」。

ところが、翌年のことです。越冬成功したウラギンシジミが飛び立った瞬間、ヒヨドリが降りたつて、さっとくわえていってしまったのです。目の前で起きた一瞬の出来事にぼうぜんとなりました。生

への旅立ちのはずが、死への旅立ちとなるなんて、涙がこぼれました。この出来事も自然の営みだとわかっていても……。

このように一つの生きものを見続けて、十年。なぜそんなに惹かれるのと聞かれることがあります。

魚の育成について

魚の種類は地球上で約二万種以上あり、産卵方法は、卵を産んでそのまま面倒を見ないというのが多

その時には迷わず、「ひと冬、ウラギンシジミを見守り続けてみて」と答えます。

これからも、ウラギンシジミの観察は続けていくつもりですが、さらに、十年後、どんな思いが育っていくのでしょうか。

(多摩丘陵野外博物館員)

石塚 治男

いですが、親が卵の面倒を見る種類もあります。

安産のお守りとして知られているタツノオトシゴ

は、雌が雄の育児嚢に卵を産み付け、二、三週間して、孵化した稚魚が雄の育児嚢から出てきますが、育児嚢の口が狭いため、雄は産みの苦しみを味わうそうです（？）。雌は雄に卵を産み付けるとさっさとなくなります。

ティラピアというアフリカ原産の魚は、よく癡狂なピラニアと勘違いされる人が多いですが、淡水魚で鯛に似た味の魚です。雌は卵を産むと、自分の口にくわえ、卵が孵化し稚魚が自由に泳げるまで口の中で保護し、子ども達のために口の中に新鮮な水を送り続けます。その間餌を摂ることができません。その期間は約二週間。稚魚は口から出ても暫くの間は母親の周りを泳いでいますが、危険が迫ると母親の口の中に逃げ込みます。

熱帯魚飼育で人気のディスカスは、産み付けた卵を両親が保護し、孵化した稚魚にミルクを与えます。ミルクと言っても、哺乳類の様なミルクではなく、両親が体表面から分泌する粘液です。稚魚は親

を突つつくようにしてそれらを食べます。このように、魚で親が子どもに餌を与えるのは非常に稀です。

他には、巣を作る魚や、卵を抱きかかえて孵化するまで保護する魚等、魚の子育て方法があります。

このように、親が卵の面倒を見る種類は産卵する卵の数は少ないのですが、食卓になじみの魚が多く含まれている産みっぱなしの種類は多くの卵を産みまします。産みっぱなしの種類でも大きい卵を産むものと小さい卵を産むものとに分類できます。魚卵のイクラ、数の子、タラコ等を比べれば違いがはっきりとします。魚の大きさにより産卵数は違いますが、マンボウは数億粒、マグロは数百万粒、イワシ数万粒、鮭三千、六千粒でそれに対して、タツノオトシゴ十、百粒、ティラピア百、千粒です。このような差



があるのは、如何に多くの自分達の子孫を残していくかの戦術の違いで、長い進化の過程で魚それぞれが選んできた結果です。

養殖されているマダイ・ヒラメ等も自然界では、たくさんのお卵を産み、それらの卵は自分自身の力で生きていき、運が良いもの、強いものが生き残っていきます。これらの魚の多産性を利用し漁業資源を増やす栽培漁業が全国各地で行われています。卵から稚魚になるまでの、死亡率が高い時代を人間の管理下において保護し、ある程度の大きさに達したら放流し、海の自然の生産力を利用し、大きくなったら、漁獲するというものです。百年以上前から、鮭の人工孵化放流が行われていますが、海の魚の場合、技術が確立されてきたのはここ二十年ぐらいです。

マダイ・ヒラメの卵の直径は約一ミリ位で、透明な浮遊卵です。マダイの場合、地方によって違いますが、産卵期は五月頃で夕方に産卵します。一尾の

雌が数尾の雄に追い掛けられ水面上で産卵受精が行われます。殆ど毎日産卵し、魚体の大きさによりますが産卵期（約一か月）に数百万の卵を産みます。

卵割が始まり、二つ、四つ、八つ、分裂します。一日以上経過すると心臓の鼓動も確認できます。水温によりますが約二日位で孵化します。孵化前には、卵の中で一生懸命動いています。ヒラメもマダイも孵化後の体長は、およそ二・五ミリでおなかに卵の黄身に当たる卵黄嚢をぶら下げています。自分で餌を捕るまでの栄養源です。サケの卵は大きく直径が約六・八ミリで約二か月で孵化し、とても大きな卵黄嚢を携えています。卵黄嚢を使い尽くすのに約二か月程かかり、その期間、礫の間の暗闇で外敵に襲われないようにじっとしています。卵黄嚢の養分を使い尽きると水面上に泳いで餌をとり始めますが、その時は、三・四センチと成長し、形も親と似て、消化機能、遊泳能力等は十分に発達していますが、マダイ・ヒラメ等は、非常に未発達な状態で孵化し

ます。目は見えず、口も開いていない、遊泳能力もなく、水の中に漂っているだけです。体も透明で、消化機能も無く、細い消化管が見えるだけで、生きているのが不思議な状態です。孵化後三日で卵黄嚢を吸収し餌を摂り始めます。目に色素が沈着し、ようやく目が見え、口も開きますが、まだまだ未熟な状態であり、目の前にある餌を食べるだけで、自分で餌を探し追い掛けることはできません。体が透明なので消化管の中で飲み込んだ餌が見えます。最初に与える餌はシオミズツボワムシ（以下ワムシ）という動物プランクトンです。大きさは長さ〇・一五ミリ、幅〇・〇五ミリと非常に小さく肉眼で見えずと水の中に浮いている細かい点です。水の中に浮遊しており、孵化仔魚の口の大きさも合い、培養がしやすく、殆どの海産魚の種苗生産の初期餌料として使用されています。

ワムシは現在養殖にとって非常に有益な役割を演じていますが、昔は嫌われ者でした。ウナギ養殖

は、現在温室内での飼育が主ですが、以前は広い路地池を使用しており、酸素供給の目的でアオコという植物プランクトンを池に増やしていましたが、それが、一晩で消失し、そのために酸素不足でウナギが死ぬということが起こり、原因はワムシが異常に増えたため、餌となる植物プランクトンを食べ尽くしてしまったということです。そのために、如何にワムシの増殖を抑えるかということが研究されました。また、その当時海産魚の種苗生産での初期餌料は、貝類の幼生などが使われていましたが、特定の時期に大量に生産することが難しく、魚類の種苗生産を行うのに初期餌料がネックとなっていました。ワムシを研究していた大学の先生が、爆発的に増えるワムシを種苗生産に利用できないかと考え、好結果を生み、全国各地で導入されました。このこととが転機となり爆発的に種苗の生産量が増加しました。

人間の健康食品として注目を集めているEPA・

DHAも重要な役割を果たしています。ワムシの餌は植物プランクトンで、種苗生産には植物プランクトンの培養タンク、ワムシの培養タンク、そして魚のタンクが必要です。種苗を百万尾を生産するには、魚用に二百五十トンのタンク、ワムシ五百トンタンク、そして植物プランクトンタンクが三千トン必要ということ、広大な土地が必要となります。

そのために、一番場所を必要とする植物プランクトンの代わりになるものが研究され、パン酵母がワムシの増殖に良いという結果が得られました。しかし、パン酵母で培養したワムシを魚に与えると生残率が悪く、奇形の魚が多く得られました。しかし、植物プランクトンで培養したワムシを与えると魚は元気で育ちます。両者のワムシを分析した結果、植物プランクトンで培養されたワムシには、EPAが含まれており、パン酵母で培養されたものには含まれておらず、EPAが魚にとっての必須脂肪酸である事が解りました。今では、DHAの方がEPAよ

りも効果が高い事が証明されています。DHA入り粉ミルクやソーセージなど売られておりますが、魚の世界でもワムシの餌として色々なDHA入り栄養強化剤が発売されています。

タイには浮袋が有りますが、これは仔魚の時に水面上の空気を飲み込んで浮袋に空気を蓄えます。元気がない魚や水面に油等が浮いて膜が出来ている場合、空気飲み込みが出来ず、浮袋が形成されません。そのために浮力の調節が出来ず、無理な姿勢で泳ぐとするので、背骨に負担がかかります。ちょうどこの時期に骨が形成されますので、背骨が曲がった奇形魚になってしまいます。EPA・DHAを摂取した仔魚は活力があり、空気を飲み込むので、奇形が生じません。

二十日過ぎて、魚らしい姿になります。ヒラメの場合は、孵化した時は、目は体の両側に位置して、普通の魚のように泳いでいます。体長が一センチを越す頃に右目が体の左側に移動します。目が移動す

るにつれて泳ぎ方も、斜めになり、目の移動が終了すると水槽の底に張り付きます。ヒラメの場合は目の移動が数日の間に行われますが、目の移動が一晩で完了する種類は、翌朝には、全ての魚が底にいますので、水槽の魚が突然消えてしまったように思えるようです。

同じ放流量ならば量よりも質の方が生残率が良くなるのではないかとということで研究が進められています。マダイでは、別の水槽に移された時に、物陰に隠れるようにじっとして、横縞模様を出すものと（横臥行動）、そわそわと落ち着き無く泳いでいるもの（非横臥行動）というように行動の違いが、良く観察されました。天然で生まれたマダイの行動は環境が変わった時には横臥行動を示します。天然の海に放流された時、ふわふわと泳いで外敵に会う機会が多い非横臥よりも、周りの環境に慣れるまでじっとしている横臥の方が、生残率が良くなると考えられます。人工種苗生産で、天然に近いような

育て方をするとなぜか全ての魚が横臥行動を示します。強い流れの中では、横臥の魚は、じっと流れに耐えますが、非横臥は、流れに負けます。ある一定時間、空気中に晒し、再び水に戻すという魚にとって過酷な試験でも、非横臥は全滅ですが、横臥は生き残ります。この差は飼育段階のどこで現れるかという点、魚の飼育密度によることが判明されました。マダイの種苗生産は、卵から体長一・五～二センチ迄、屋内のタンクで飼育されますが、それ以降、放流されるまで、海に設置してある生簀で飼育されますが、その時の飼育密度を従来の三分の一に減らすことで、天然の魚に近いものが生産できます。

このように環境が与える影響は大きいです。同じ親から生まれた魚でも環境により成長等に差が出ます。魚を育てるということは、如何に魚にとって良い環境を提供し続けることができるかと考えています。

（株）環境リサーチ・養殖システム部）

ザリガニの赤ちゃんと共に育つ

阿部 康子

新しい園生活が始まり少しの不安と期待に目を輝かせた子ども達で賑わった四月から、園庭の若葉がまぶしくなる五月半ば、どの保育室にもお玉じやくしや蛙、めだか等の小さな生き物が子どもと一緒にやってきました。

「せんせい、これ」と差し出す容器の中にお玉じやくしがいっぱい、「あら、お玉じやくし、どこにいたの」「おばあちゃんの田んぼにいた」「そう、あり

がとう、皆のお友だちだね」そんな会話が交わされ、保育室やテラスに様々な生き物の水そうが並びます。手で搔き回し捕えようとする子、それを止めようとする子、ひたすら見つめてその場を動かない子、いろいろな表情が集まって賑わう一つの場となっていくます。

そんなある日我がクラスにも待望のザリガニがじゅんちゃんのパケツに入ってやってきたのです。

中には赤黒い斑点に大きな二本のはさみを振りかざしたザリガニが四匹もいたのです。早速じゅんちゃんの手からバケツを受け取った新任のS先生、「大きなザリガニだね」と驚きながら少し戸惑った表情。それでも「早く広いところに入れてあげよう」と子どもにせかされてザリガニの家作りが始まりました。飼育図鑑を頼りにベビーバスと水そうの底に洗った砂と小石を敷き園庭の池から汲んだ水を張って、どうやら家ができ、ザリガニは二匹ずつ分けられて新しい暮らしが始まったのです。

次の朝、一匹のザリガニのはさみがちぎれており元気がないのに気がついたS先生と子ども。ケンカしてやられたのかな、お腹が空いてケンカをしたのかもかもしれない、等と話し合ううちS先生は再び子どもと図鑑を広げてケンカをさせない為に一匹ずつ隠れる場所を作ることにし、「昨日作ってあげればよかったね、ごめんね」と反省しながら子どもが探してきた割れた植木鉢を入れました。その二日後、は

さみをなくしたザリガニは死んでいました。S先生は「煮干しもきちんとあげたのに……」としょんぼりして登園する子どもを迎えたのです。

残りの三匹が死なない為にはどうしたらよいか子どもとS先生は真剣に考えた末、毎日水を替える、えさの煮干しを細かくしてやることにし、子どもとS先生の日課となりました。それでも三匹のザリガニは次々と死に一月半後、じゅんちゃんと一緒にやってきた四匹のザリガニ

は全部死んでしまいました。S先生は勿論、じゅんちゃんを始め毎日世話をしていた子どもたちには大きなショックでした。

その後しばらくの間は「じゅんちゃんのザリガニ大きかったよね」「こわくつかまえれなかった」な



ど話題にのぼったが、夏を迎えた園庭はプールで戯れる子どもの歓声、くま蟬の鳴き声、しゃぼん玉飛ばしや泥んこに夢中の子ども達で賑わうようになり、赤黒いからだに赤い斑点、二本の大きなはさみを振りかざしてやってきた四匹のザリガニとの生活は終わっていました。

一学期を終えて、反省の中で

保育という子どもとの営みの中で大きな意味を持つ一学期の反省は様々な視点、角度から保育者の在り様をあぶり出していく作業になります。その一つの視点にお玉じゃくしやだんご虫、蛙、かたつむり等の子どもの身近に生息する小さな生き物との出会いがあります。保育の中でその出会いをどのように用意したか、どう出会わせたか、子どもにとって出会った体験は何であったか、その子にとってどのような意味を持ったのであろうか、その時保育者はどうであったか等が話しあわれたのです。

M先生は四歳児のだんご虫探しの行動から……。

I先生は子どもと見たかたつむりの産卵の姿を中心に。A先生は子どもと一緒に世話をしていた兎が六月のある日死んだこと。兎が死んだと騒ぐ子どもたちに、五歳児でもあることから死んだ兎をタオルで包み一人一人に抱かせたこと、そして子どもは「冷たい」「かたくなっている」と誰もが神妙な表情でつぶやきながら抱いていたこと、死という厳粛な事実がどれ程子どもに伝わったか分からないが死との出会いも大切にしたいという思いを語ったのです。

—— S先生の反省

私はこの園にきて初めていろいろな生き物と出会い、飼育するという事にぶつかって戸惑うばかりで子どもに教えて貰って終わってしまいました。兎の死に出会った時もA先生のような思いは考えてもみませんでした。私のザリガニが何故短期間に死んでしまったのか、エサは煮干し以外のものも考えてみ

るべきでした。水そうの水替えも毎日するのが適していたか、水草や藻を与えることに何故気付かなかったかと今思うと残念でなりません。今後は一つ一つのことにじっくりと向き合っていきたいと思えます、と反省しきりでした。

S 先生とザリガニ

そしてS先生には保育者二度目の年が始まったのです。私はY先生が丹念にザリガニを飼育してようやくお母さんザリガニから離れた子どもザリガニがいることを知って、その子どもザリガニを育てることをすすめました。S先生はY先生から六匹の小さなザリガニを受け取り育て始めました。

ザリガニの家づくりに変化が出た

水そうに数く川砂と小石の層が昨年の倍程の厚さになり、石や、ほど良く割れた植木鉢が置かれ前日から汲み置いた水をたっぷり張り、Y先生の助言も得て水そういっぱい水草、藻を入れザリガニの

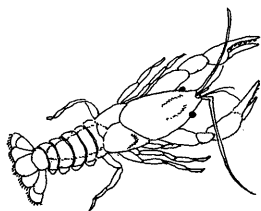
子どもが安心して過ごせるものにできあがりました。

新鮮な水草、藻を求めて

「田んぼの水路を見つけると車を降りて、水草は生えていないか、藻はどうかと探そうち恰好の場所を見つけました。明日子どもと一緒に水そうの水替えをします」とバケツいっぱいの水草を持参して嬉しそうに話す姿は生き生きとして、ザリガニの飼育を楽しんでいる気持ちが率直に出ていて私にとっても嬉しいものでした。

ザリガニが脱皮したよ

ある朝、出勤したS先生はザリガニの脱皮を見つけてすごく感動した様子で「ザリガニの脱皮って大変なんですね、とても疲れているみたいです。今日はそっと休ませてあげるように、子どもに話します」と話してく



れました。その後もザリガニの子どもたちは何回も脱皮を繰り返して次第に大きく成長していきました。

水草採りの中で沢山のザリガニに出会う

何時もの水路に水草採りに行ったら自分の育てているのと同じ位のザリガニがいっぱいいるのに出会って、あんまり可愛いのでクラスの子どもたちにも出会わせたいと思って連れてきてしまいました、といったずらっ子のような笑顔で見せてくれました。

そしてS先生の発見！「何時も水が流れていて、美味しい水草のいっぱいある所がザリガニは好きなんです、自然に近い状態で飼育するのは難しいけれど子どもと一緒に頑張ってみます」でした。

今年の反省会でのS先生

ザリガニの子どもが何回も無事に脱皮して良い成長をしていること。水替えは二日に一回位が適当であるらしいこと。エサは煮干しより水草やちくわ、

じゃこが良いらしいこと。更に何時も気を配っていることが大切だということ。そして何よりも保育者の思い入れが子どもにより多くの興味を呼ぶように思いました、とS先生は語ってくれたのでした。

十月現在、Y先生から貰い受けた六匹のザリガニの子どもは大きく成長して心地良い三箇の水そうの水草の中から元気な姿を見せています。しかし運動会等の行事で十分な世話ができずにいるとたちまちザリガニに異変が起こります。慌てて水や水草を取り替えてホッとしたり、忙しい中で日照に気を配る等のS先生の細やかな心使いが目にとまるようになりました。S先生の成長も先輩保育者や子どもたち、ザリガニと共にあったように思うこの頃です。

(愛知双葉幼稚園)

滄桑の街・香港から③

香港らしさ

今井 七重

早いもので、香港へ来てから半年が過ぎようとしています。

娘たちの通う香港日本人学校大埔校には、ようやく夏休み明けから、国際学級の生徒が入学してきました。従来からある香港日本人学校とは、姉妹校の位置をとりながらも独自の特色を打ち出している大埔校の

実質的なスタートです。一国二制度の香港同様、昨年四月に開校されたばかりの各校二学級制の新設校日本語クラスで学ぶ娘二人を通して、学校の様子を少し述べて見たいと思います。

日本語クラスは、各学年二十名から三十名の二クラス編成（但し、六年生のみ一クラス）です。一方、教

室が別の階にある国際クラスは、日本の幼稚園年長にあたるREから四年生までの一クラス十三、四名の五学年からなっています。国別には、イギリス・日本の十六名を筆頭にアメリカ十二名、オーストラリア、香港中国、マレーシア、韓国と続きます。(十月現在)

当初の予定では、休み時間が一緒なので国際クラス、日本語クラスの密なる連携が日常頻繁にみられるはずでしたが、国際クラスが開校したばかりでもあり、お互い遠くから、様子を伺っている状態です。「休み時間に、国際クラスの子はお菓子食べている、いいなあ」というのが、娘たちの初感想でした。

国際クラスは、毎月一回「スペシャル・テーマ・デイ」があります。九月は、「海賊」がテーマで当日、子どもたちは皆海賊の格好で登校、その日一日は、海賊の話や歌や詩が校内を流れ、宝捜しも行われ、学校がまるで宝島に変身するのです。先生までも海賊に変身して、気分を盛り上げます。それを登校時間や休み

時間に垣間見た子どもたちの感想は、「私も、国際クラスに行きたいな」でした。

指定の制服はあるものの、入学の時期の四月には売り切れがあったり、日本からの入荷が遅れたりするところもある場所柄、強制力はありません。似たようなものであれば、構わないというわけです。事実、上着など、校章のプリントのない白の上着をきている生徒の方が多いぐらいです。そんな中、先日「ドレスカジュアルデイ」という催しがありました。これは、制服にとらわれず、カジュアルな服装で登校し、くつろいだ服装で楽な気持ちで登校できる事を感謝する意味で、わずかな金額で良いから、困っている人を助けるための募金に協力しましょう、という日です。主催は香港の公益基金協会で、教育署も積極的な協力を行っており、香港政府を始めとする政府機関、香港の各学校、各組織が参加するもので、大埔校でも参加する事になり、子どもたちは、カラフルな洋服を着て、心ばかり

の募金をもって登校しました。日本の「赤い羽根の共同募金」に似ていますが、服装と結びつけているところが、ユニークだと思いました。

大埔校の特色のもう一つの大きな柱であるイマージョン教育も九月になりスタートしました。

「イマージョン」とは、英語で「どっぷりつかる」の意味で、英語にひたりながら本来の目的である図工の授業を行っていくというものです。授業はすべて英語で進められます。一年生から週三時間ある英会話の先生たちとも連携をとりながら、二時間連続の図工の時間、先生は一切日本語を話さず、目的を果たすわけです。子どもたちがどんな反応を示すかとても興味がありました。

「何をいつているのか、はっきりわからないけれど、見ていれば、なんとなくわかるよ」といって、それなりの作品を仕上げてきます。英語に対する抵抗はあまりないようです。長女の担任の先生の説明によると、

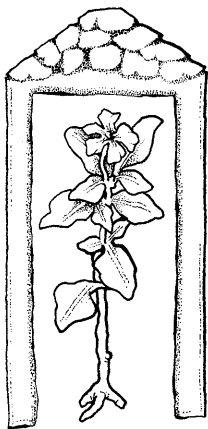
教師「Draw stem green and yellow. And paint some leaves green.」

生徒1「……」静かに聞いている

生徒2「ねえ、わかった？」小さな声で隣の子にささやいている

生徒3「葉っぱね。オーケー、オーケー」

とさまざまな反応を示すそうです。そして、「葉っぱ、葉っぱ、葉っぱのことだよ」と周りの子に教える生徒の大きな声につられて、教師の方が「ハ、ハ、ハッパ？」と日本語を教わる場面もあるらしい



く、とてもほのぼのしい印象があります。

娘たちも日本の学校とは違った経験を色々としているようです。

私も、ここに来て、ある意味の香港らしさを感じる経験をしています。

水周りの悪さは噂に聞いていましたが、ここ三週間で我が家のトイレはトラブル続きです。トイレ用の水は海水を使用しているためか、どの家庭でもパイプの老朽化が激しいようですが。ある日、突然フラッシュレバーが作動しなくなりました。レバーを固定しているネジが壊れたようです。すぐにアパートを管理しているオフィスに電話するのですが、「修理の人の都合を聞いてからコールバックする」との返事。ようやく翌日電話がかかってきて、「早くて三日後」と悠長な返答。待ちに待った修理の人が来てから、二日後、今度はタンクに水がたまらなくなりました。今回は、内部のチェーンが切れている様子です。前回と同じ経過

で修理の人がきて、ほっと

したのも束の間、今度は、

レバーが向こうへいったき

り、戻ってこなくなりました。

水を流すには向こうに

いったきりのレバーを手で

元に戻してからという、面倒な事になったわけです。

クレームをつけたら、即対応してもらえると考えるこ

と自体、ここでは、非現実ともいえます。早くて三

日、下手をすると催促の電話をする迄、平気でほって

おかれたりもします。狭いのにトイレが二つあるのは、

こういう事態に対応するためではないかと思わ

ず、勘ぐりたくなるほどです。それから、数日後、今

度はトイレが二つとも流れなくなりました。又、管理

事務所に電話かと憂うつになっていたら、どうやら同

じ棟の人が同じ被害にあっていることが判明しまし

た。つまり、共同タンクが空になっていたようです。



これは、さすがに五時間後に回復しました。トイレのトラブルがあるたび、内部を覗いていたせいか、このところトラブルの原因を推測できるほどになりましたし、またかとあきらめの境地にも達し、「どうしてすぐに対応してくれないのだろう」と怒るより、「二つあつてよかった、人命にかかわることではないし」と思うようになりました。人間が丸くなった感じです。

洗面所の下のパイプから水がぼたぼたと漏れはじめた時も、「またか」と思いましたし、事実下見にきた管理事務所の人に「修理の人が来るまで、約一週間ぐらいいかな。その間バケツで受け止めて下さい」との悠長な返答に「ここが香港、私は香港に暮らしている」と改めて思ったぐらいで、おとなしく、いわれた通りにしていました。

香港は日本のバブル時期と同じなのか、この住宅環境でどうしてこんな値段がついているのかと思えるくらいの家賃です、私たちの住んでいるアパートは、上

級マンションに属しているそうで、（最高級ではありませんが）家賃は約五十万円もします。しかし、上の階の人が、シャワーを使う音もよく聞こえますし、玄関を一步出ると、隣のテレビの音から、話し声まですべて聞こえます。つまり、私が子どもを怒る声もすべて、聞こえているわけです。日本でならば、とても気になり、怒る時には、窓を閉め切る等工夫をするところですが、ここは香港。同じフロアーには、イギリス人、韓国人が住んでいるので、今日も気にせず、怒っています。

時として、失意を感じる出来事に会おう香港ですが、それもまた、面白いと感じる事ができるようになりつつある今日この頃です。

（元幼稚園児の母・香港在住）

あそびはらっぱものがたり

ふゆ

すとうあさえ

ものすごい大風が吹いたある日、あそびはらっぱは、予定を変更してゴミ袋片手に園庭に飛び出した。袋に風を捕まえようとかけまわる子、袋をマンツにしてみんな身体中で風の力を感じていた。暑くても寒くても関係ない。子どもは、まさに「風の子ども」。では、あそびはらっぱものがたりのはじまり、はじまり。

たき火だ、たき火だ

年が明けて一回目のあそびはらっぱは、たき火。園庭には保育で野菜スープを作ったりするため、ブロックで簡単なかまどが出来ている。そこに小枝や枯れ葉を集めてきて、火を起す。「今日はたき火ですよ」と発表したとたん、「ほくが火をつける。

マッチでつける」と意志表明したK君。言葉通りにマッチをシュッ、シュッとすって頑張っている。何回トライしたかな、なかなか火が着かない。それでもあきらめない。口をとんがらかして、しゃがみこんで、かまどとむかいあったまま何度かやってみる。十分くらいたった頃、シュッと火がついた！

K君には感動している余裕はない。「熱い！」かまどにマッチを投げ入れたとたん、マッチの火は一瞬にして消えてしまった。「あーあ」と思わず落胆の声をあげた私を無視して、K君は再びトライし始める。男の子が何人か寄ってきて、K君の手元を見て行くが、「ぼくもやってみる」という子はいない。

私は、今度火が着いたら、すぐに新聞紙に火をうつせるように、新聞紙を丸めて手にしっかり持って待機する。そして、とうとうマッチに火がつき、新聞紙にもめでたく火がうつり、かまどにそのまま入れて急いで小枝を重ね、あおぐ。火がひよろひよろ大きくなった。まずは大成功。K君に「やったね」と

言って拍手。そばにいて見物していた女の子たちも「すごい」と言いながらパチパチ。K君は照れたような笑みを浮かべて、満足そうに一言。「ぼく、遊んでくる」。

後日、K君のお父さんにこの火のことをお話ししたら「キャンプにいても、家でも自分でマッチを使うことはなかったはず」とのこと。なんで、K君がこの日こんなにマッチで火をつけることに頑張ったのかは、わからない。きつとすぐくすぐくやってみたかったんだね。大人には慣れきったささいな事でも、子どもたちにはたまらなくやってみたいことが、この世の中にはたくさんあるのだろうなと思う。さて、たき火の番は私。下ゆでしたお芋を子どもたちとアルミホイルに包んで火の中に入れた。火をいじりながら、お芋が焼けるのを待つ……なかなかいい時間。子どもたちは、時々やってきては火に葉っぱや枝をいれていく。「まだ？」といいながら、お芋をつつついていく。

千春さんと千恵さんは、園庭で割り箸鉄砲やさんを開店中。割り箸鉄砲は、割り箸と輪ゴムで作った鉄砲で、弾は輪ゴム。ひたすら、撃ちまくっている子もいれば、K O君は地面に落ちた輪ゴムを拾い集めて他の子に分けてあげることを楽しんでいる。撃ち合いの基地にと、大きな段ボールを園庭に置いておいたところ、女の子たちの希望で「お家」に変更になる。基地がマイホームに……平和で何より。

もうそろそろあそびはらっぱが終わるといふ頃、子どもたちが見守る中、待望の焼き芋を一つ出しかじってみた。「あつ、おいしい!」。みんなも、さっそく食べ始める。アツアツのお芋をふうふういいながら食べるのは楽しい……しかし、恐ろしいことに、芋の中心がまだかたかった。「かたーい!」と口々に不満の声があがる。私たちも「かたーい!」。下ゆでを十分にすれば良かったと深く反省。柔らかい所だけ食べて、後にはりんごの芯のような姿のお芋が残って、本日のおそびはらっぱは

幕。

縄文人になろう!

人はいつから、火を使い始めたのだろう。北京原人の遺跡には、灰が化石になって残っていたそう。ということ、四十万年から五十万年前に、火が生活に使われていたということになる。すごいなあ。今はマッチやライターですぐに火をつけることが出来るが、大昔の人たちはどのように火を得ていたのかー原始式火起こしの術を、冬の土曜日の午後、みんなで体験してみた。さらに、野焼きにもトライ。さらにさらに、縄文スーブも賞味してみた。ゲストに原始生活史研究家の田中稔さんファミリーをお招きして、小学生やお父さん、お母さんたちにも参加してもらい、「あそびはらっぱ拡大版」で行った。野焼きする粘土作品は、十一月のおそびはらっぱで作って、二か月間かわかしておいた。とにかく細かい。小さい。小指の先位のお団子。針金の

ように細い鼻の象さん。これは、野焼きしたらどうなるのかと心配になり、何度のもっと大きく、太くとアドバイスしたのだけど、子どもたちは「作りたいのを作るんだ」という姿勢を崩さない。S君は、何度も何度も作りなおしては、溜め息ついて「難しい……」とつぶやいている。「これ、いいねえ」と心から言っても「いやなんだ」と言ってみてしまおう。とうとう、彼は一番長く粘土をいじっていたのに、作品を作らなかった。

田中さんは、細かな作品を火の周辺に置いたり、大きな器の上にまとめて置いたり、工夫しながら野焼きをスタート。小枝や丸太をうまく組み立てながら、火加減を調節する。同時に焼き具合をチェックしながら、粘土を段々火の中央に入れていく。縄文の人々は、野焼きを一年に一度、秋にしたそうだ。その時に一年間使った土器を全て壊して、新しい土器を焼いたという。

野焼きと並行して、縄文スープ作りと、田中さん



野焼き風景 カット・永田千春

の奥様の提案で突然「パン」を焼くことになる。縄文スープは、里芋、きび、あわ、豚肉（本当は猪）、干しえび、大豆、小魚を大鍋にわかした湯の中に放りこむだけ。味は塩味。縄文の人の食は、山の幸、海の幸を豊富に利用して、保存食も存在したそう。スープは、食べやすいように豚肉も使ったので、調味料は塩だけとはいえ、結構おいしくいただけ。パンは、強力粉に細かくしたアーモンドと蜂蜜少々、それに水を入れて、手でこねるだけ。それを小枝の先を包むようにつけて、野焼きの中の火で焼いて食べる。手軽に出来て、ほんのり甘く、お母さんにも大人気。クライマックスは、田中さんの火起こし。田中さんは、原始時代の発火技術（きりもみ式）六秒の記録を持つ火起こし名人。ヒキリ板のくぼみでヒキリギネ（棒）をぐるぐる回転させて、摩擦のエネルギーで熱を起こし、たまった木くずの熱を逃がさないようにゼンマイの綿やシロカイメンタケ等で火種を大きくする。大きくなったら、

燃えやすいススキの穂、スギ皮で包んでぐるぐる腕を振って空気を送りこむと、突然、炎になる――と解説しても、よくわからないと思う。百聞は一見に如かず。田中さんが、私たちの目の前で火をつけた瞬間、「おお」という歓声が起こった。まるでマジックを見せられたような気がした。その後、すぐにみんなもトライしてみたが、簡単に出来るもんじゃない。ムキになって棒を回転させているお母さんもいる。煙りはたつのだけど、火種までいかない。あそびはらっぱの子どもたちもやってみるが、まるで力が足りない。小学生もいいところまではいくのだが、だめ。大昔は、火を扱えることは、一人前の証だったのだろう。今は、火は危ないからといってさわらせないのが一般的だが、火の扱い方を知ることが、生きる力と知恵の原点かもしれない。もっと火と遊ぶ機会を、あそびはらっぱでも持ちたいと思った。野焼きはともうまくいった。素焼きは素朴でいい感じ。灰で黒くなったり、炎のいたずらで焼け

具合にもグラジュエーションが出来たりして、楽しい仕上がり、みんな大喜び。でも、中には壺の取っ手が壊れてない、たこの足がない、という声も聞こえてきた。焼け跡を目をこらして捜したけれど、結局出てこない。次回は、大きく太く作ることを徹底してやろうと反省。

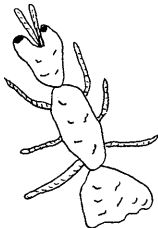
それにしても、野焼きのたき火で「お餅」を焼いて食べてたお母さん、「たき火っていったら焼きなすよ」と、しっかりしょうが醬油持参で焼なすを食べてたお母さん。遊び心があるっていいな。たき火の煙りの臭いが全身にしみこんだ冬の日だった。

ふわふわちゃん

今日は、羊のサリーちゃんの毛を、フェルト状にして好きなものを作る。あそびはらっぱでは珍しく、アトリエに机とイスを用意し、サリーちゃんの毛、お盆、ビニール、せっけんをセットした。「きょうは、フェルトだよ」という気分ではらっ

ぽはスタート。「つぎ、どうやるの?」「これくらいでいいの?」「ねえねえ」と、子どもたちの声がアトリエにうわんうわん響く。千春さんと私は大忙し。お盆の上にサリーちゃんの毛を薄く広げて、縦横につみ重ね、お湯でせっけんを溶かして作ったせっけん水をも十分にかける。その上にビニールを置き、まん中から外に向けて手で空気を外に押し出す感じでこする。さらに、端っこまで丁寧にやさしくこすって摩擦をかけていくうちに、羊毛はフェルト化されていく。せっけんのツ

フェルトの作品 4点



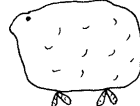
3,めろわかまきり



タリにかいたい



3,めろわきまきり



3,めろわもるちゃん

ルツルを手の平で感じながら、子どもたちの小さな手はよく動き、楽しく作業はすすんだ。サリーちゃんの手は真つ白のフェルトになり、子どもたちの力でこすった程度のふわふわ感がまたいい風合をかもしだしている。「わあ、ふわふわさんだね」と私が言うと、「うさぎつくる」「モルちゃんにする（モルちゃんは、幼稚園にいるモルモット）」と声があった。幼稚園にいるモルモットやハムスターを観察しに行く子もいるし、図書室から動物や虫の図鑑をもってきて何を作ろうかと見ている子もいる。なんにも見ずに、フェルトをいじくりまわしながら作るものを見つけ出していく子もいる。創作にもいろんなアプローチの仕方があるものと実感。さて、虫の図鑑をじっと見ていたM君は「かまきり」に決定。フェルトをかまきり風に細長くして、ひもの足をつけた。K君はフェルトの一部をまるめてみたり、ひもで結んでみたりして、作りたいもののイメージを見つけたそうとしていた。そしてとうとう

出来上がったのが「タコにかいたイカ」。すごい発想。創造力と想像力は、やはり子どもにはかなわない。

キッズアイ

小さな子どもたちの視線から見える世界は、きつと面白いだろうな。小さな子どもたちが切り取るシーンって、どんなだろう。私と千春さんの好奇心はもくもくと膨らんで、とうとう子どもたちにインスタントカメラを渡し、自由に撮影してもらうことにした。まず、本番前に、私たちが撮ったちょっと変な写真を子どもたちに見せた。壁の穴だったり、足だけだったり、後ろ姿だったり、ちょっと不気味な変身写真もあったりと、バラエティーに富んだものを用意した。そして、「これだあれ?」「これなあに?」とあてっこクイズをした。園長先生の後ろ姿の写真を見て、「T君のママ」。T君も「ママだ」と少しはにかみながら答える。うーん、後ろ姿は年

齡差をカバーするものかと思いつつ「園長先生ですよ」と種明かしすると子どもたちの目はまん丸になった。

子どもたちにカメラを渡すと、性格が出て面白い。五分で二十四枚撮り終えてしまったM君。ゆっくりゆっくりスルメをくっちゃくっちゃかじるように長く時間をかけて撮るMちゃん、Yちゃん、M Aちゃん。出来上がりは、一九九七年のある一日に、子どもたちが見た物の記録として大切にしてお母さんたちにも見てもらった。ここで子どもたちの写真をお見せできないのが残念。近くで撮りすぎてぼやけているもの、フラッシュを押さなくて暗いもの、難は多々あるけれど、どれも無条件に面白い。「見上げた窓、その窓の向こうに見える木の枝」「壁についた手のひらのあと」「水道の蛇口」「足だけ」「布の模様」……大人は決して撮らないモノたちがずらりと勢揃いしていた。その写真を見ている

と、子どもの時の自分の見ていた世界、目の高さ、そこにあるように妙に懐かしい気がした。そして昔、私も子どもだったんだなあとしみじみ思った。

＊

あそびはらっぱの子どもたちとお別れする時に、私たちが贈ったのは『おもいでこぼこ』と『短い時』を一人に一つずつ。『おもいでこぼこ』には、どんぐりとぶどうで染めたガーゼの一片、野焼きした土器の破片、サリーちゃんの毛、みんなで団子にしたしいのみ……あそびはらっぱで一緒に遊んだものたちを手作りの小箱に詰めた。Uちゃんが「ずっと大事にする」と言ってくれたのがうれしい。

幼稚園の屋上はらっぱに柔らかいよもぎの葉が頭を出し始めた。さあ、よもぎ団子を作ろう。四季をひとめぐりして、あそびはらっぱは、また冬から春へ……。

(幼年童話作家)

編集後記

今月の特集は〈育てる〉です。生き物と共に暮らす四人の方を通して、子どもを育てるということを考えて見たいと思います。

＊

〈育てる〉というテーマについて考えていたとき、「神話的時間」一冊の本に」という記事を新聞で読みました。「神話的時間」とは、「子ども」のころ、遊んだり、お話を聞いたりしているとき、ふと気づくと、あっという間に時が過ぎていた「そんな時間」のことで、この本は、熊本子どもの本研究会が二年前に出版した『神話的時間』（鶴見俊輔他著）を読んだ読者が投稿した百七十五編を

掲載したもの、素材は雑多だが子どもに関することが割に多い、と紹介されていました。以前に友人からもらって読んだ前書を、早速取り出してもう一度読んでみました。

この本の中で、鶴見氏は、かつて無文字社会だったころ流れていた神話的時間、人はそれを今の暮らしの中で体験できる、それは（文字を知らない）子どもたちとかわるときである、そう考えると、子どもを育てることは楽しいことである、といっています。

〈育てる〉ことは、能率を第一に考える近代的な時間の中ではとても難しいことです。そんな中で私が体験した楽しいひとときを、「神話的時間」という言葉で表すことができることを知って、自分の子育てが認められたように思いました。（A）

幼児の教育

第九十七巻 第二号

（一九九八年二月号）

定価五五〇円（本体五二四円）

発行 平成十年二月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒101-0051 東京都港区三田五丁目二丁目

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―六六一三（営業）

☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）

振替 〇〇一九〇―二一九六四〇

☆

本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

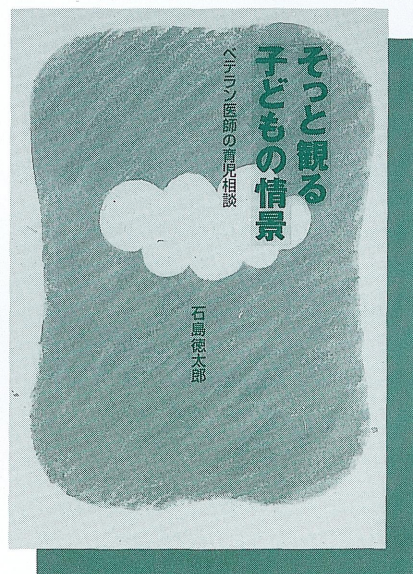
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

子どもの世界が見えてくる
児童精神科医30年の育児相談を通して語る子どもの真の姿

そっと観る子どもの情景

◆好評発売中◆

親や大人は子どもの遊びの意味を取り違えがちです。真の子どもの内側の意味がわからないと、いろいろな問題を解決できません。こうした事例22話を取り上げ、育児相談30年のベテラン児童精神科医が子どもの問題を解明してくれます。



石島徳太郎・著

B 6 判・200頁・定価：本体1,800円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル館創業90周年記念出版

保育の基本〈全6巻〉

21世紀の保育を見つめて、今、保育の基本を問い直す。

幼稚園教育要領や保育所保育指針の中で示されている「保育の基本」は、さまざまな形に受容され実践に移された。しかし、そこに誤解に基づく混乱はなかったか。本シリーズは、具体的な事例を通してその混乱をただし、あるべき保育の姿を提案します。



- ◆ 第1巻 環境を通しての保育とは
- ◆ 第2巻 生活と遊びを通しての保育とは
- ◆ 第3巻 個と集団を生かす保育とは
- ◆ 第4巻 自由の中で規律が育つ保育とは
- ◆ 第5巻 発達に合わせて援助する保育とは
- ◆ 第6巻 総合的指導による保育とは

編集委員

森上史朗 (青山学院大学教授)
高杉自子 (子どもと保育総合研究所)
今井和子 (東京成徳短期大学助教授)
後藤節美 (別府市・石垣幼稚園長)
田中泰行 (東京都・向南幼稚園長)
渡辺英則 (横浜市・港北幼稚園副園長)

- 今特に問題となっていることを各巻のテーマに
- 子どもに寄り添う保育を
- これからの保育への提案

判型/A5判・頁数/各216頁 セット定価: 本体12,000円+税

キンダーブックの
フレーベル館